

1

(2・4・10 各完答)

1 自 分 の 頑 強  
2 か え ま う

3 紙  
4 A ウ  
B エ  
C イ  
5 イ

6 自 分 に は 認  
7 五

8 グ レ  
9 ア  
10 ア  
イ  
1 ウ  
ウ  
1

11 a 信 念  
b 列 挙  
c 青 少 年

2

(3・7 各完答)

1 a 放 課 後  
b 校 庭  
c 代 役

d 反 省

2 エ  
3 I 田  
II お  
III 気

4 エ  
5 ぬ れ ぎ ぬ  
6 かけ時計が

7 A エ  
B ア  
C ウ  
D イ  
8 (記述題)

9 ウ  
10 エ  
11 ア  
12 イ

2

8 菜 々 の 笑 顔 に よ っ て 、  
教 科 書 が な く な っ た の  
は 菜 々 の し わ ぎ だ と 確  
信 し た と い う こ と 。

(同意可)

配点	
1	11
2	1
各2点×7=14点	
2	8
6点	
その他 各4点×20=80点	
100点	

1

「自動思考」がどのようなものかという説明は直後の文に書かれているのだが、この部分の説明では長すぎて字数に合うところがない。どういふものなのかをつかんだ上で説明を読んでいけば、いくつか「自動思考」の内容にあてはまる部分が出てくる。ぴったりと指定の字数に合うのは――線⑤の二行前の「自分の頑強なワンパターンの思い込み」である。

2 まず傍線部の「それ」が「自分の勝手な思い込み」であると結びつけると、本文十行目にある「自分勝手な思い込みの部分で行動してしまう」というところが同意であることがわかる。するとその直後には「かえって損なことが次々と起こってしまう」とあるので、これが答えになる。つまりは悪循環のことである。

3 問いの「抜け出す方法」に注目すると、本文十二行目に「自動思考から脱却するためによくやる手法は、紙に書いてみることだ」とはつきり書かれている。この段落の話題はまさに「自動思考の解決策」であるから、それを通読時につかんでおくことが肝要である。

4 (A)の直後に自動思考に振り回された行動の具体例が書かれているので(A)には「たとえば」がはいる。(B)の前には「部長についての悪い思い出が次々と蘇ってきたりする」とあり、後には「変な対人行動をとってしまう」とある。このいずれかに陥りがちであるということ(B)には「あるいは」がはいる。(C)は直前の「二分思考」の認知パターンを直後できわしく説明しているといえるので(C)には「つまり」がはいる。

5 直後に「シンネンを強めていく」とあるので、元々思っていた「自分の勝手な思い込み」がより強くなって、悪循環が続いていくということである。そうなる初めの思い込みのイが答えになる。

6 本文最後の行にまとめとして「重要なのは、自分には認知の歪みがあることをまず意識化することである」と書かれている。

7 「自動思考」「二分思考」「過度の一般化」「レッテル貼り」「自己関連づけ」の五つである。

8 直前に「白か黒か」とあり、これがヒントになる。そんなにはつきり分かれるものではないという筆者の言いたいことがわかれば、「グレーゾーン」ということばを知らなくても出てくるのではない。ただし、ことばの知識としても「グレーゾーン」はよく使われることばなので知っておいてほしい。

9 「あてはまらないもの」を選ぶことに注意すること。一つの例を「一般化」つまり「全体がそうである」と考えてしまうのが「過度の一般化」である。Aは一人の生徒の評価をしているだけなのであてはまらない。ちなみにAは「レッテル貼り」である。

10 Aは「必ず」がおかしい。本文中で『認知の歪み』がないかどうかをチェックしてみる必要がある」とあるので、「認知の歪み」にあてはまらない可能性もあるということである。イは二分思考の説明がされている段落の内容と合っている。ウは本文最後から三行目の内容と一致する。

11 a「信念」は「念」の上の部分で「令」としないようにしよう。b「列挙」は「並べ上げること」。cは「青年」と「少年」を合わせたことばで「若者」を示すことばである。

2

1 a「放課後」の「放」や「後」の右側を続け字にしないように気をつけよう。b「校庭」は「庭」の中を「延」にしないように注意すること。cは「代わりの役」という意味とともに覚えよう。dは難しくはないが、「省」の下を「日」にしないように注意しよう。

2 場面を正確にイメージ化できているかどうかのポイントである。この場にいるのは「教頭先生」「菜々」「かおり」「梢」「田丸先生」(他にも教師がいるが)の五名である。「腹だたしげ」から怒っている人になる。この場では説教をする役割の「教頭先生」となる。「コツコツと」「机をたたたく」というのも典型的なイライラの描写なので正しくつかめるようにしておいてもらいたい。

3 本文九行目に「そう決意するだけだ」とあり、その直後に田丸先生をこまらせることをどうしてもしてしまう理由が書かれている。次の文が「そのうえ」で始まることにも気をつけて、もう一つの理由もしっかりつかんでおこう。

4 直後には「なにか問題が起きるたびに三人の名があげられ」とあるのだから、問題児であることは明らかである。それが同じ段落に書かれているのだから作者がこの三人をどう描きたいのかという意図も見えてくるだろう。「半分は」「まったくおぼえないこと」とあるが、それまでの三人の素行が「疑われる素地」を作り上げたともいえるのである。

5 この場合、「ぬれぎぬ」とは「無実の罪」という意味である。よく「ぬれぎぬを着せる」という言い方で使われる。

6 (B)の直後の行である。ここでの「かけ時計」の音は現在に話を引き戻す役目をしていともいえる。ていねいに読んでいけば特に難しくはないだろう。

7 前後の表現にぴったり合うものを選べばよい。(A)は「教卓のひきだし」の音を示す「ガタガタ」、(B)は「ほおを」「ふくらませる」様子をあらわす「パンパン」、(C)は「口をひらいた(話し出した)」ことを示す「ぼつり」、(D)は驚いたことを示す「ぎよつ」がそれぞれ答えとなる。

8 「何によって」の内容は西田先生が目にした「菜々の笑顔」である。教師をからかって楽しんでいることから出ている笑いだ和西田先生は受け取ったのである。その前で「川辺、おまえだな!」と、菜々が犯人であるという見当をつけていたのだが、菜々の笑顔を見て「やはりおまえだったんだな!」と思ったということである。というわけで「菜々の笑顔で菜々を犯人だと思った」というのではなく、「菜々の笑顔で、菜々が教科書をかくした犯人だという自分の予測が当たっていたと思った」という内容が正確な説明になる。

9 ここで西田先生が怒っている事件はぬれぎぬだが、「教科書をかくす」といういたずらについてである。

10 「ぬけだした」とははつきり書いていないが、問3の「田丸先生の授業がおもしろくない」「気候のいい日」という理由でわかる。ウで迷うかもしれないが、ただまじめに聞いていないだけで教頭に呼び出され厳しく説教されるのも不自然である。

11 前半に書いてあった菜々の田丸先生に対する思い、このあとしばらく沈黙がつづくことなどを結びつけて考える。イ・ウ・エのような思いなら沈黙にはならないのではないか。

12 傍線部の「ちよつととまどつたように」に合うものはイだろう。

以上